

1学期の成果と2学期の方向

<先輩から後輩へ>

数年前の9月、ある地域のお祭りでのことです。その地域では、新築したお宅や区長さん宅などを神楽が回っていき、獅子舞を行います。お囃子は神楽保存会の大人たちで、獅子を舞うのは小中学校の男の子たちです。獅子舞の練習は地域の大人たちが指導しますが、2人1組で舞いますので年上の子どもが年下の子どもに教えることもあります。お祭り当日は午後から夜にかけて10軒ほどのお宅を回りますが、それぞれのお宅から子どもたちに、袋に入ったお菓子や飲み物などのお土産が出ます。子どもたちは着物を着て下駄を履き、背中にはナップザックといういでたちで、いただいたお土産をナップザックに入れて、にこにこしながら次のお宅へと回っていきます。最後は神社に神楽が集結し、女の子たちによる舞を行ってから、今度は各神楽の代表者（大人）が獅子舞を奉納し、一日目は終わります。

獅子舞が終わったあるお宅で、その家の方がお土産を代表の中学生にまとめて渡した時のことです。

大人「これ、みんなで分けてね」

中学生「ありがとうございます」

「おい、みんな、『ありがとうございました』って言ったか」

「順番に並んで。はいこれ……（お菓子の袋を手渡し）」

中学生がリーダーシップを発揮して、他の男の子たちをまとめています。年上の子どもはお祭りの中でそれぞれの役割をこなし、年下の子どもへ獅子舞の仕方だけでなくマナー・礼儀も指導しながら、お祭りを楽しんでいます。

ここには生活の中に異年齢の交流があり、年上が年下を指導する、リードする習慣がありました。現在の神楽保存会の大人たちも、子ども時代はそうやって先輩から教えられ、後輩に教え、そのことが現在まで引き継がれてきています。少子化により子どもの数が減ってきており、地域では様々な課題を抱えていますが、こうした異年齢の交流や、それによる先輩後輩の関係は脈々と受け継がれているように思います。



<育ってきているもの>

1学期を振り返っていろいろなところから意見や感想を聞きましたが、異年齢交流による「たてわり活動」がよかったとの意見が多かったです。今年は清掃をすべてたてわり班で活動しています。6年生の班長は班を取りまとめ、分担や手順、無言の取組、後片付け、反省会などを教え、進めていきます。昨年度は期間限定での実施でした。毎日に位置づけられた今年は、清掃時間中とても静かになり、ふざけている姿も見られなくなりました。また、もっときれいにするために、子どもたち同士でやり方を工夫したり、道具を選んだりする様子も見られるようになりました。毎年立派になった6年生が卒業していくと、5年生は翌年どんなリーダーシップを発揮してくれるのだろうと周りの期待が膨らみます。また5年生自身も「最上級生として頑張らなくては」という責任感を感じるようになります。今年の6年生は4月の初めから一人一役を担当し、大変忙しい中、全校のリーダーとして学校を引っ張ってくれています。準備する時間を特別に取っているわけではありませんので、休み時間や給食後の時間を利用しながら、行事や集会に備えています。6年生が他の児童と一緒に活動する、周りに教える、励ますなどの姿は、5年生から1年生までの子どもたちが日々見ており、あこがれや信頼の気持ちが育っているの

でしょう。「自分たちが6年生になったら〇〇なことをやってみよう」というような気持ちも芽生えていることでしょう。

似たようなことが、先週合唱指導の講師を招いて学び合った場面でも見られました。講師の富澤裕（とみざわゆたか）先生の全校合唱の指導中、子どもたちと次のようなやり取りがありました。

富澤「『すーばーらしーいな〜』 この声、6年生出してみよう」

6年生「すーばーらしーいなあ〜」

富澤「いいねえ。すばらしい。体育館の中に響いているでしょ。」

5年生「すーばーらしーいなあ〜」

次は5年生、6年生みたいな声でやってみよう

4年生「すーばーらしーいなあ〜」

富澤「さすがです。次は4年生やってみよう」

3年生「すーばーらしーいなあ〜」

富澤「いいですねえ。次、3年生お願いします」

2年生「すーばーらしーいなあ〜」

富澤「ちゃんとできていますね。2年生やってみよう」

1年生「すーばーらしーいなあ〜」

富澤「すごい、2年生できました。1年生やってみよう」

富澤「本当にすごい。6年生は6年間学んできているから出せるんだけど、1年生はまだ始めたばかり。でも6年生みたいにやってみようとしたらできちゃった。歌はね、6年生みたいに出したいなと思ったら出せるんだ。そして、みんなで一緒に出した声は1つに聞こえる。合唱に上手い下手はないんだね。『やろう』と思ったらその通りにできるんだよ」



富澤「上手になろうと思って練習したら、必ず上手になる。上手になりたいという気持ちをもっている人は上手になる」

専門的なことを教えたわけではありませんが、6年生をモデルにやってみたところ、どの学年も6年生のような発声ことができました。6年生のようにやってみようという意識が高まり、気持ちがひとつになった瞬間でした。6年生という先輩の存在が大切で、実に大きいことが改めて分かりました。

同学年内でのコミュニケーションに留まらず、異年齢の交流を通してコミュニケーションの幅が今後とも広がり、互いに成長していけることを期待しています。

<10/25 音楽会に向けて>

今月末に行われる音楽会の準備が本格的に始まりました。各学年、演奏曲も決まり、毎日素敵な音楽が校内に響いています。

音楽会のねらい

今まで学習してきたことを発表し合ったり鑑賞し合ったりすることによって、音楽の美しさを味わったり、表現活動を通して仲間と協力して音楽を創り上げる楽しさや成就感を味わったりすることができる。

本校では音楽会を、「保護者や地域の方々の協力のもとに創り上げる、壮大な『授業』」と位置づけています。子どもたちも職員も一緒になって、追究し積み上げたもの、そこに「学び」が生まれます。単なる発表会ではなく、みんなで創り上げる「演奏会」にしたいと考えています。それについて、次の3点を大切にしていきたいと思います。

1 「練習」から「追究」へ

単調に繰り返すことに終始するのではなく、「どんなふう演奏したいか」「誰に聞いてほしいか」「どんなふう表現するか」などみんなで考え合いながら追究していくことが「学び」につながり、授業となります。9月の校長講話でも、「どんなふう演奏したいか」についてみんなで考え合ってほしいと伝えました。

2 「仕上げる」から「積み上げる」へ

先週より今週、一昨日より昨日、昨日より今日、今日より明日、というように、毎回学んだことを積み上げていきます。音楽会は最終ゴールではなく、音楽を学び追究する活動は今後も続いていきます。仕上げようという意識から、一つ一つ積み上げて今までで最高の演奏を、と

いう意識で取り組みたいと思います。

3 「失敗を叱る」から「育ちを意味づける」へ

完璧に仕上げようとすると、どうしてもマイナス面に目がいきます。失敗が許されない雰囲気漂います。間違えずに演奏することはもちろん大切ですが、音楽会が終わって「歌うことは楽しい」「演奏することは楽しい」「演奏を聞くことが楽しい」といった気持ちをもたらすような音楽会でありたいと思います。

子どもたちの精一杯のステージをお楽しみに。

<音楽会を、ステージと会場、みんなで創り上げる>

音楽会当日は、「子どもたちのステージでの演奏」「演奏後の心のこもった拍手」「会場のマナー」これらすべてがそろって「芸術」となっていくように思います。音楽を絵画に例えてみます。

ステージでの演奏	→	画用紙やキャンバスに描かれた絵（作品）
演奏後の心のこもった拍手	→	絵を飾る額
演奏前と後の移動中の静寂	→	額に入った絵を展示する会場（美術館、博物館）

演奏する者だけでなく、会場の私たちも一緒になって創り上げていきたいですね。美術館で大騒ぎする様子は見られません。静寂も芸術の一部を担っています。「演奏」「拍手」「静寂」、三拍子そろうことによって「さらにすばらしいステージ」となることでしょう。それが「演奏会」であり、「芸術」となるのだと思います。

当日は、子どもたちは「こんなふう演奏したい」「ぜひ聴いてほしい」という気持ちでステージに立ちます。精一杯の演奏（作品）を、温かい拍手（作品を飾る額）と静寂（会場の雰囲気づくり）をもって、みんなで創り上げられたら幸いです。

